

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	横森大輔
論文題目	相互行為の中の文法—日本語会話における副詞節構文の創発と秩序—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、会話分析と相互行為言語学の観点から、日常言語の文法的知識が、日常会話の話し手と聞き手の相互行為において、どのような役割を担っているかを考察する実証的研究である。具体的には、日本語の副詞節（特にカラ節とケド節）の文法的・語用論的な現象を、実際の会話データに基づいて分析している。本論文の主目的は、次の三点にある。第一の目的は、日本語の副詞節構文が、会話の中でどのような秩序の下で使用されているかを記述する点にある。第二は、一見すると無秩序に見える日常会話の創発的な振る舞いの中に、文法的知識に基づく秩序が見出せることを示す点にある。そして第三は、人間が、文法（すなわち特定の言語形式に関する慣習的知識）を利用して、様々な相互行為のための課題に対処してく方略を明らかにする点にある。全体は7章から成る。</p> <p>第1章では、まず本研究が志向する問題として、自然言語には精緻な文法体系が備わっている一方で、それが実際に使用される中では規範的な文法からの逸脱とみなされる現象が数多く観察されるという点を明らかにしている。また研究の背景として、「相互行為と文法」のアプローチの発展の学説史的な経緯とその意義を述べ、言語研究全体における本研究の位置付けを示している。さらに本章では、本研究の分析対象となる具体的な言語現象として、副詞節という文法カテゴリーの特徴づけを行った上で、日本語における副詞節の諸構文の基本的な特徴を概観している。</p> <p>第2章では、「相互行為の中の文法」を捉えるために必要な、会話分析・談話機能言語学・相互行為言語学の研究で蓄積されている理論的・方法論的な知見を導入している。特に本章では、伝統的な言語学のアプローチから相互行為論的な言語学のアプローチに転換するために、6つの重要な視点を導入している。第一に、言語を「話し手の認知の反映」ではなく「社会的資源としてのディスプレイ」として見なす。第二に、言語使用は「情報に関する秩序」によってではなく、「行為に関する秩序」によって動機づけられているものとして捉える。第三に、言語分析のスコープを、「単文」ではなく複数の発話の有機的つながりである「連鎖」とする。第四に、言語使用とその分析の基本ユニットを「文」ではなく「ターン」とする。第五に、「第三者的・事後的・モノ的」な視座からではなく、「当事者的・実時間的・プロセス的」な視座から言語を捉える。第六に、「作例データ」ではなく「実データ」を用いて研究を行う。本章では、以上の相互行為論的な言語研究へのアプローチの諸点を明らかにしている。</p> <p>第3章では、カラ節の&lt;前置構文&gt;の分析を行っている。具体的には、一般に類義表現とされるカラとノデが関わる副詞構文の比較分析に基づいて、言語表現（特に接続表現）を、&lt;話し手の認知の純粋な反映&gt;ではなく、&lt;相互行為上の目的のための「話し手の認知のディスプレイ」&gt;として捉え直す分析の枠組みを提案している。さらに本章では、会話コーパスにおける両者の相互行為的作用の比較に基づき、カラが特定の判断材料（カラ節）から、結論（主節）を導き、ノデが「本題（主節）を理解するために、背景事情（ノデ節）を知識領域に登録する認知のディスプレイを行っている点を明らかにしている。</p>			

第4章では、ケド節の前置構文の分析を行っている。日本語の接続助詞ケドは、一般的には逆接の関係を表すマーカールと見なされている。しかし、実際のケドの用法は非常に多岐にわたっており、逆接という概念だけで単純に捉えられるものではない。従来の研究では、例えばケドの用法として、「対比」「逆接」「譲歩」「前置き」という4つの用法を挙げている。しかし、この種の用法はケド以外の言語形式によっても実現する働きであり、ケドを用いて「対比」「逆接」「譲歩」「前置き」を行う要因については、当該の文の周囲の文脈の特徴を考慮しなければならない。本章では、自然な会話データで観察されるグローバルな文脈を射程に含めることで、「ケドによる対比・逆接・譲歩・前置きは、どのような時に、何のために、行われるのか」という問題を考察した。具体的には、先行研究において「対比」「逆接」「譲歩」「前置き」と呼ばれていたケド節の各用法は、それぞれ「スタンスを精緻化する」「想定外の出来事として定式化する」「協調的行動から非協調的行動に進む」「新しい活動の開始を準備する」といった相互行為上の働きとしてより具体的な定式化が可能である点を明らかにしている。そして、ケドによる対比・逆接・譲歩・前置きが、いかに言語使用の文脈における要請と緊密に結びついているかを明らかにしている。また、ケドには多様な用法があるが、ケドは「その節は、現在進行中の相互行為の中で、対比的背景情報である」という点をマークしており、そのマーキングが、個々の文脈において様々な相互行為上の働きをするために利用され、秩序立った形で理解することができる点を明らかにしている。

第5章は、カラ節とケド節の後置構文の分析を試みている。日本語の話し言葉において、しばしば副詞節が主節に後置することが知られているが、その積極的な動機づけについては十分に研究されていない。本章では、局所的なやりとりにおいて参加者が直面する相互行為上の課題の観点から、副詞節の後置を動機づける要因を考察している。その結果、まず、カラ節の後置は、会話の展開において、主節と先行文脈との緊密な関係性を保つための処置である点が明らかになった。これに対し、ケド節の後置は、会話の相手からポジティブな反応が得られないことへの対処である点が明らかになった。また、聞き手の反応行動を定量的に分析した結果、ケド節の前置構文と後置構文が生起した場合、ケド節の前置構文に対して聞き手はポジティブな反応を示しているのに対し、主節の聞き手の反応がネガティブであった場合にケド節が追加的に産出されているのがケド節の後置構文である、という傾向が明らかにされた。

第6章では、カラ節とケド節の単独構文（副詞節単独発話）について分析している。日本語の話し言葉においては、カラ節やケド節といった副詞節が、主節を伴わずに単独で発話を構成する現象がしばしば観察される。従来の研究では、カラ節やケド節の単独発話が有する特徴的な語用論的効果に着目し、その記述を行っている。本章では、先行研究の記述をさらに深めるため、「単文」ではなく、複数の発話間の「連鎖」というより広いスコープにおいて、この構文の使用の秩序を考察している。本章の考察では、特に次の点が明らかになった。カラ節やケド節の単独発話は、カラやケドが本来の接続助詞としての用法から全く別の終助詞として文法化したのではなく、接続助詞としてカラやケドが本来備えている性質が日常会話における相互行為の文脈で利用された結果、創発した構文であるという点が明らかになった。

以上の研究を背景に、第7章では、理論・実証の双方の観点からみた本研究の意義と今後の展望について論じている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本研究の意義および独創的な点としては、伝統的な言語学と会話分析という2つの領域にまたがる学際的研究として学術的貢献を行っている点が挙げられる。言語学の分野に対する貢献としては、次の6点がある。

第一に、本研究は、後置構文や単独構文を含む日本語の副詞節の多様な振る舞いに関して、体系的な記述と説明を与えている。従来の国語学や日本語学の研究では、接続助詞カラやケドの用法に関する記述の試みはなされてきたが、それぞれの多様な用法に関する一貫した説明は十分になされていない。また、後置構文や単独構文については、それぞれ「倒置」「言いさし」と呼ばれてきたことに示されるように、静的な言語観に基づくアドホックな記述しか与えられていない。本研究では、独自に構築した自然会話コーパスの綿密な観察に基づき、当該の構文が使用される文脈上の特徴の記述に重点的に取り組んでいる。本研究は、日本語の副詞節の振る舞いに関する様々な言語事実を綿密に分析し、体系的な記述を与えている点にその独創性が認められる。

第二に、本研究では、自然言語の文法を研究する手法として会話分析の枠組みを利用することの有用性を示し、またその実践モデルを提示している。伝統的な文法研究は、当該の言語形式について事後的視点から分析する静的な研究が主流であったのに対し、近年の言語学においては文法の動的な側面への注目が高まり、またそれに伴い話し言葉データの利用への関心が高まってきている。その一方で、実際の会話データを利用した文法研究を見た場合、その困難さから実際の動的な会話分析に基づく研究は決して多くない。このような状況の中、会話分析の理論的・方法論的知見から得られる新たな視点の導入により「文法研究の相互行為論的転回」を提案し(第2章)、ケーススタディ(第3章～第6章)によってその実践例を示した本研究は、今後の言語研究の発展にとって貴重な草分けの一つとして位置づけられる。

第三に、本研究は、言語運用と言語能力の二分法的な区分を越えて、一般に文法研究の領域外とされがちな話し言葉に関わる言語データの分析が、十分に文法研究としての価値を有していることを示している。一般に、ある言語形式が文脈の中でどのように使用されるかという議論は、「語用論の領域であって文法の領域ではない」あるいは「言語運用の問題であって言語能力の問題ではない」とされる傾向にある。それに対して本研究では、文法を母語話者が身につけている言語知識の体系として理解するのであれば、ある言語形式と結びついたグローバルな文脈構造のパターンも、文法システムの一部を構成するものと考えべきであることを論じている。

第四に、本研究は、文を超えた単位での文法研究の意義を示している。現実の言語使用について想起すれば容易に分かるように、どのような文も必ず特定の文脈の中で生起する。したがって、文の構成要素の中には、文の内部構造の秩序というよりも文の外側に作用するものとして形作られているものが存在する可能性は十分にある。本研究は、日本語の副詞節構文に焦点を当て、一文を越えたグローバルな文脈の中で捉える視点を取り入れることで、自然言語の文法へのより豊かな洞察が得られる可能性を示している。

第五に、本研究は、認知言語学の知見をより豊かな研究として取り込む方向性を提示している。ウィリアム・クロフトが“*Toward a Social Cognitive Linguistics*”と題される論文の中

で論じているように、現状の認知言語学には社会的・相互行為的視点の導入が望まれる。本研究は、言語研究において、「認知」を単純に言語形式を決定するものというより、言語によってディスプレイされ相互行為に利用される資源として位置づける方向性を示し、認知言語学と機能主義言語学の接点を見出している。

第六に、副詞節構文の創発的使用という、通言語的に一般性の高い現象をとり上げることで、他言語における類似の現象に研究に向けての見通しを与えている。とりわけ、副詞節の単独構文は、文法化の研究においても注目を集めている現象であり、本研究の成果は、類型論・文法化理論など広く言語学一般に対して有益な知見を提供する。また、本研究は、会話分析の分野に対しても次の3点において貢献を行っている。まず、日本語の日常会話に頻出する形式であるカラ節やケド節について、日本語学の伝統を踏まえた上で相互行為の観点から記述を行った本研究の成果は、会話分析の研究者が日本語会話データを観察・記述する際の有力な基礎づけを与えている。また、特定の言語形式の特徴づけという言語学の研究課題に関して会話分析の枠組みが有用であることを示し、それによって会話分析という枠組みが学問分野の垣根を越えて有効であることを明らかにしている。さらに、日本語の助詞類がどのような行為に利用されるかという、これまでの会話分析の研究の中で十分に研究が行われていない領域の課題に取り組んでいる。換言するならば、本研究では、言語学や会話分析などの研究分野を超えて、人文科学全体に関わるより一般的なレベルでの貢献がなされ、日常の言語使用が非常に緻密に組織されている事実を綿密に分析することにより、人間の知性と社会性の一面を明らかにすることに貢献している。また、本研究で得られた具体的な知見は、日本語話者が自分自身の言語文化を、そして日本語学習者が対象言語である日本語の言語文化を、より深い水準で理解することに貢献するものと考えられる。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等に関わる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年11月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                      年                      月                      日以降